

2021年10月8日



コロナの先にある未来を考える（高齢化に対する認識の転換）

社会政策課題研究所

所長 江崎 禎英

コロナの先にある未来を考える（高齢化に対する認識の転換）

今や先進国を中心に、コロナの先にある未来を模索する段階に入っています。新型コロナウイルス感染症が始まる以前、世界の先進国共通の課題は高齢化でした。高齢者人口の増大、認知症の広がりを含め、急速に進む高齢化にどう対処するかが、世界共通の課題でした。新型コロナウイルスのパンデミックが収束するにつれて、こうした課題が改めて私たちの未来に立ちだかる壁であると認識されるでしょう。

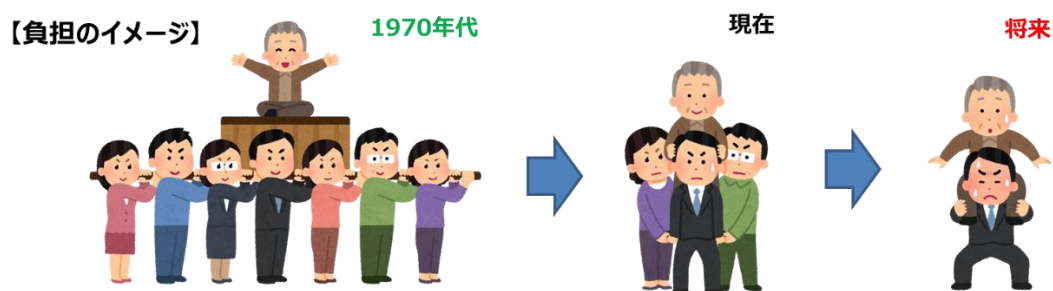
実際に欧米のみならず、中国や台湾、インドネシアなど世界各国の政府関係者やアカデミアの方々に高齢化についての認識を問うと、「高齢社会は暗い社会だ。高齢者の増大によって経済活動は沈滞し、医療費が増大する」といった答えが殆どです。

その結果、どの国でもそうした課題を解決するために、「イノベーションが必要だ。技術革新によってこの状況を打破しよう」と新技術の開発を政策目的に掲げます。人は大きな課題に直面すると、思いもよらない新技術によって問題が解決されることを期待しがちです。イノベーション・シンドロームとも言うべき状況です。実際にはそんな都合良く新たな技術生まれて問題が解決することは期待できません。

イノベーションの本質は「常識」を変えることです。技術開発はそのきっかけに過ぎません。常識を変えないままいくら技術開発を行っても問題解決にはつながりません。常識を変えるための第一歩として、まずは視点を変えて高齢化の意味を捉え直して見る必要があります。

1. 高齢化に対する認識

高齢社会を暗い社会と考える傾向は、世界で最も高齢化が進む日本でも同様です。特に、少子化に伴う人口減少とも相俟って、高齢者を支える社会保障費の負担を若い世代が担う姿を、かつての「おみこし型」から、「騎馬戦型」になり、将来的には「肩車型」になると例えられてきました。将来世代にとっては負担ばかりが増えるイメージが植え付けられてきたのです。



こうしたイメージで高齢化を語っていると、コロナのトンネルを抜けた先にある未来が決して明るいものではなくなってしまいます。私たちが未来を考える際には、「高齢化」に対する認識を改めるところから始める必要があるのです。

2. 人類に与えられた生物学的な寿命

高齢社会を憂う前に、そもそも私たち人類はどれほど長生きするものなのかについて確認しておきましょう。最近の研究では、生物学的なヒトの寿命は約 120 年とされています。私たちの遺伝子には「命の回数券」とも言われるテロメアが付いており、細胞が分裂する度に少しずつ短くなるのです。テロメアがゼロになると如何に元気な細胞でも分裂限界を迎えて死滅します。実験などにに基づき、私たちの細胞がテロメアを使い切るまで分裂する時間を計算すると、ほぼ 120 年になるそうです。これが生物学的な寿命の根拠です。

興味深いことに、人の寿命が 120 年であることは遠い昔から認識されていたようです。旧約聖書の創世記第 6 章に人の寿命は 120 年であると書いてあります。また、東洋では 60 歳を還暦と呼びますが、そもそも還暦とは「暦が一周した」という意味です。暦が二周する 120 年には「大還暦」という名が付けられており、これが人生の完成形になるのです。

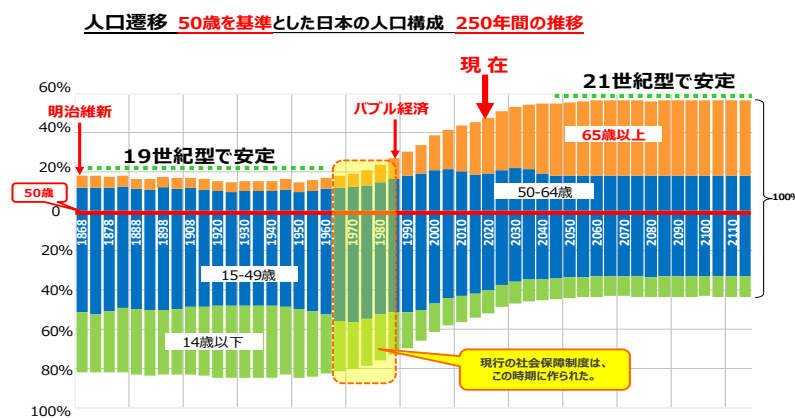
ここから推定されるのは、旧約聖書が書かれ、還暦という言葉が生まれた 3000 年、4000 年前にも 120 歳まで生きた人がいて、同時にそれ以上生きた人はいなかったということでしょう。だからこそ洋の東西を問わず 120 という数字が基本になっているのだと思われます。これは生物学的な寿命と符合します。

仮にすべての人々が生物学的な寿命である 120 歳まで生き、人口が安定した理想の社会を想定すると、高齢化率は理論上約 46% になります。現在、世界一高いとされる日本の高齢化率は 2021 年現在で 29.1% です。まだまだ高齢化は進むのですが、高齢社会は私たちが健康長寿を求め、それが実現した場合における必然の姿なのです。

3. 人口遷移 50 歳を基準とした日本の人口構成 250 年間の推移

別の視点で高齢化の姿を見てみましょう。近年日本社会は、明治維新から 150 年という記念すべき年を迎えました。これまでの 150 年とこれからの 100 年という 250 年という長期スパンのなかで、日本社会がどのような人口構成で成り立って来たのか、今後どのような姿になっていくのかを見てみましょう。その際、視点を変えて 50 歳を基準にグラフを描いてみます。50 歳というのは子育てがほぼ終了する時期と言われています。多くの生き物は子育てが終わると寿命が尽きるように、生き物としての役割は一区切りです。しかし、私たち人類は、子育てが終わってからの時間が最も長く与えられている生き物なのです。

日本の人口構成（年齢層別人口割合の推移）



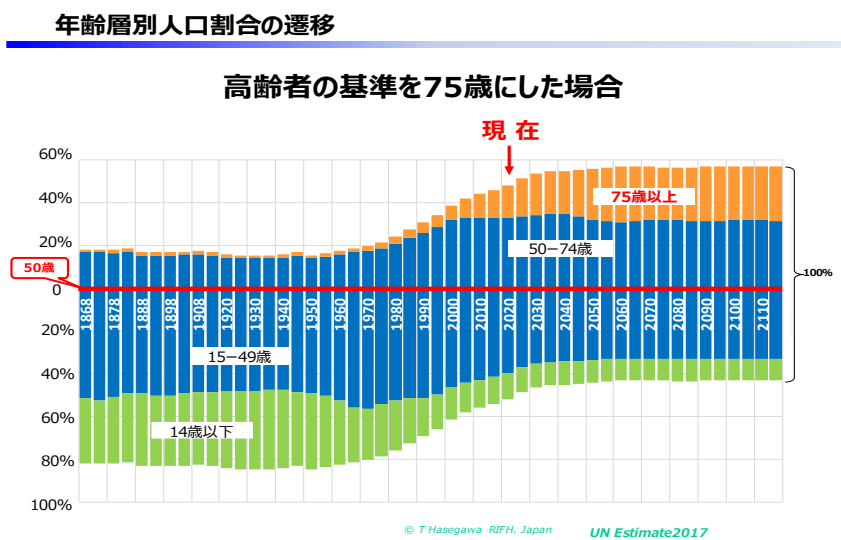
このグラフから見えてくることは、「昔は沢山子どもが生まれて沢山亡くなり、生き残った者が社会を支え、リタイアした後は若干余生を送って亡くなる」というものでした。これを仮に 19 世紀型とすれば、おそらく 1000 年以上続いていたと思われます。60 歳を「還暦」として祝うことには一定の合理性があります。

これに対して、今後は生まれる子供の数は少なくなります。先進国における一般的な傾向です。他方、日本は乳児死亡率が世界で最も低く、世界で最も赤ちゃんが亡くならない国です。日本で生まれる赤ちゃんの殆どが長生きできるのです。これを 21 世紀型とすれば、おそらく今後こうした時代が 1000 年以上続くと考えられます。私たちは 1000 年に一度とも言える人口構造の大転換期の真ただ中にいるのです。しかもこれからは、他の生き物には例を見ないほど長期にわたって生きることのできる時間が与えられるのです。

ただ、このグラフを見る限り、オレンジ色で示された 65 歳以上の割合が多く負担感を禁じ得ません。しかし、実際には 65 歳で役割を終えている人はむしろ少ないのではないのでしょうか。65 歳以上を高齢者と定義することで、無意識のうちに将来を暗いものと感じているとすれば、この認識を改めることで違った未来が見えてくる可能性があります。

4. これまでの「あたりまえ」を見直す

実際のところ昔に比べて高齢者の方々は元気になっており、体力的にも 10 歳近く若返っているとされています。これを踏まえて、日本老年学会が「高齢者の定義を 65 歳から 75 歳に引き上げてはどうか」と提案しています。そこで高齢者の定義を 75 歳にした場合のグラフを作ってみると、未来の姿は違って見えてきます。

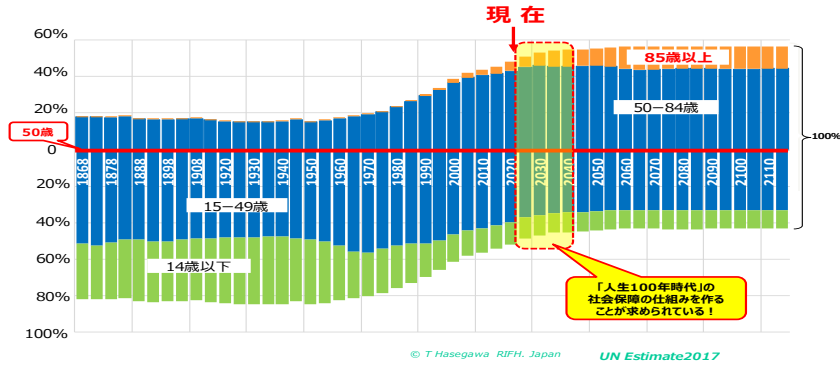


しかし実際には、75 歳を超えても元気なお年寄りも少なくありません。そこで高齢者の定義を 85 歳にした場合のグラフを作ってみると、高齢社会のイメージが全く違ったものに見えてきます。子育てが終わった後に、自分と社会のためだけに全てのエネルギーが使える素晴らしい時間が豊富にあるのです。人生の本番は 2 周目なのかもしれません。

仮にこのような時代が到来するのであれば、これに見合った形で社会保障の制度を見直せばよいのです。

年齢層別人口割合の遷移

高齢者の基準を85歳にした場合

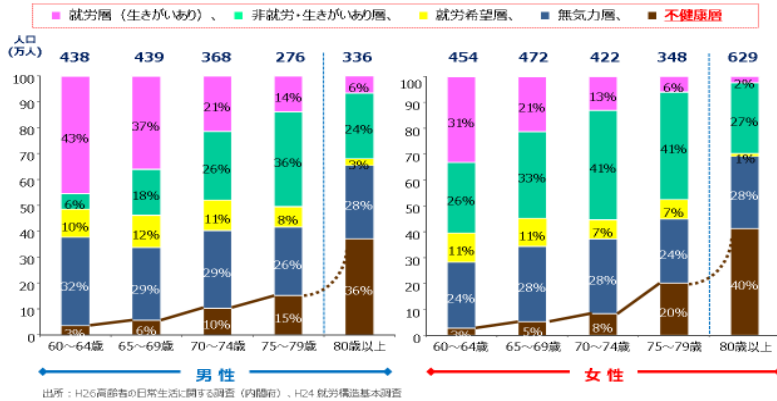


こうした説明をすると、85歳は非常識だろうとの批判もあると思われます。しかしながら、高齢者の健康状態を年齢と性別に分けたグラフを見ると、現在日本では、男性の85%、女性の80%が、80歳近くまで身体的には何の問題もないことが分かります。ここで問題なのは無気力層（青色）です。身体的には何の問題もないのにやる気がありません。このカテゴリの多くの方々が、近い将来認知症に移行するものと考えられます。

高齢者の健康状態と活動の状況

○ 80歳近くまでは、男女ともに**大半の高齢者が身体的に健康な状態を維持**している。

年代/性別に高齢者をタイプ分けした場合の割合推移



このように視点を変えてデータを見直してみると問題の本質が見えてきます。高齢化は「対策」すべき課題ではありません。取り組むべきは、高齢化率を下げるのではなく、高齢化に対する認識を変えることです。誰もが健康で長生きすることを望みそれが可能になれば、社会は必然的に高齢化します。「高齢化対策」という言葉を使うことによって、お年寄りに肩身の狭い思いをさせ、政策そのものを誤らせる可能性があるのです。

私たちは「超高齢社会」というと、会社を定年退職した後にやることのない高齢者が沢山いる社会を想像しますが、その認識を改めることが必要なのです。つまり、高齢者が最期まで自分のことを自分で決められる自律した生活を実現するとともに、社会的な役割と自由を持ち続けられる社会を創ることが、今後私たちが取り組むべきテーマなのです。